

これから

——あとがきに代えて

これから——協力者の力をかりて、ネットの「被爆者の声」の英語版を制作して核兵器保有国とくにアメリカの青年向けにインターネットで発信したい計画です。

三年間ほど、こんどはビデオカメラをもつてもういちど被爆者をおたずねしたい。映像はなんらかの形で作品化して、これも協力者の力をかりて英語化し、核兵器保有国とくにアメリカの青年向けにインターネットで発信したい計画です。

三八年まえ長崎放送に在職中、被爆者の録音をはじめたころ、七〇年代、被爆者をたずね

て聴きとりを収録していたころ、「被爆者の声」をアメリカの青年につたえるなど、思いもおよびませんでした。アメリカはひろいひろい太平洋のはるかかなた。アメリカ合衆国の政治、経済、文化の中心地、東部・大西洋側は北米大陸のさらに東のかなた、地球のうらがわです。

インターネットというあたらしい技術によって、太平洋も北米大陸も瞬時にとびこえ、じぶんのいるところとアメリカ中枢をつなぐウェイ、ハイウェイが開けていること、そういう世界にうとかったわたくしが、さいきんになって気がついたのです。

放送局を退職することによってじぶんの作品をひとびとへ伝えるメディアをみずから放棄したわたくしは、ながいあいだ井伏鱒二さんの小品『屋根の上のサワン』の主人公サワンのような心をいだいて、月の夜空を見あげていました。羽根をいたためもうとべなくなつたサワン。仲間たちはふるさとへむかつてゆうゆうと大空を渡つてゆく。放送局の仲間たちの作品は電波という翼にのつてゆうゆうと大空を翔んでゆく。翼をうしなつたじぶんはもう空をとべない。ふたたび空をとべないまま他郷で死んでゆくのだろうか。かえらぬ卵をあたためるめんどりのような心境で長く録音テープをまもってきました。

協力者によってあたらしい翼があることに気づかされたのです。

協力者のお名前は古川義久さん。長崎市出身・コピーライター。埼玉県在住。手帳はとっておられなかったようですが、父上は入市被爆者、ご本人は被爆二世です。

ボランティア・グループの皆さまが、「声」の文字おこしをひきうけて下さり、今は別のグループが英訳を下さっています。

磁気テープによるアナログ録音という、ごくプリミティブな技術の録音機が開発されたことよって、被爆者は「声」を遺せるようになりました。「声」はCDによりがえり、インターネットというあたらしい技術によって宙空をとんでいます。さしあたりは世界中の、日本語を理解できる人々のところへ。やがては英語を理解する世界中の人々のところへ。

中学の英語の時間にこんなことばをなりました。

「フェアー・ゼアリズ・ザ・ウィル（意志があるところに）ゼアリズ・ザ・ウェイ（道がある）」

つよい意志の力をもってことにあたれば道はひらける、という格言です。

情報技術革命の時代は逆になっていることに気がつきました。

「フェアー・ゼアリズ・ザ・ウェイ（道があるところに）ゼアリズ・ザ・ウィル（意志が生まれる）」です。

これまで被爆国の青年たちのなかに、核兵器不再使用、核兵器廃絶の意志のあとつぎをふやしたいと思って作業にとりくんできました。

よりいっそうたいせつな、あと半分があることに気がつきました。核兵器保有国の青年のなから、核兵器製造、備蓄、配備、使用の意志のあとつぎをへらしてゆくことです。青年たちが核兵器使用結果の実相を知り、その意志を失ってゆけば、たとえば物理学を専攻する学生たちのあいだで、核兵器をつくるような分野が不人気になってゆけば、核兵器保有国はその意志のあとつぎをうしなってしまうでしょう。被爆者が高齢化し、亡くなってゆくと同様に、核兵器をつくってきた人々もかならず高齢となり、すべて亡くなってゆきます。後継者がいなくなり、作りすぎた核兵器が、しだいに老朽化し、物理的に劣化し、信頼性があやういものとなり、無用なもの、むしろ自国に危険なものになってゆけば、核兵器保有国も廃絶への国際的な話し合いを模索せざるをえなくなるでしょう。

世界中で英語を理解する人々がどのくらいいるか。見積もったことはありませんが、核兵器保有国の米英はむろん、インド、カナダ、オーストラリアなど大英帝国の植民地であった国、地域にそうとうの数いると思います。他の核兵器保有国でも、核兵器製造にたずさわ

ような知識人の多くはかならず英語を理解します。

彼らは決して「鬼」でなく、善良な市民、家庭人であり、なによりまず人間であって、被爆者がなにを語っているか、理解してくれると信じています。わたくしは「楽観論者」です。二二世紀に生きのこった人間に、それ以外の生き方がありえましようか。

二〇〇六年一月古希をむかえました。核地獄に堕ちた人類に助かりをえてほしい。その上でじぶんにできそうなことはこころみて死にたい一念。正しい仏法による衆生済度を願って、高齡をおして遠くインドへ旅だったり、はるばる日本へやってきたりした、法顕、鑑真、真如のうしろにつき従って死にたい一念です。

坦々たる大道をゆうゆうと歩む平穩幸福な人生も人生。達成至難な理想を胸に、老ドンキホーテとなって悪戦苦闘するのもそれなりに人生。

後漢光武帝の武将馬援はこんなことばをのこしてくれています。

「男児はまさに辺野に死すべきを要す。馬革をもって屍をつつみ、かえりて葬むられん。いずくんぞよく床上に臥して兒女子の掌中にあらん」

高村光太郎は「道程」で、「僕の前に道はない／僕の後ろに道はできる」とうたいました。情報技術革命の時代は「僕の前に道はできていた」です。道がひらけている以上、歩いてゆかないわけにいきません。

「この遠い道程のため

この遠い道程のため」

欄筆 二〇〇六年一月五日